

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	小節構造における不定詞補部 : 再構造化構文におけるdi-INFと ϕ -INF
Author(s)	上野, 貴史
Citation	言語文化学会論集 , 43 : 3 - 17
Issue Date	2014
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045409
Right	Copyright (c) 2014 言語文化学会
Relation	



小節構造における不定詞補部

—再構造化構文における *di*-INF と ϕ -INF—

上野 貴史 (大阪女子短期大学)

1. はじめに

「主動詞＋不定詞補部」で形成される複合述語(Complex Predicates)は、一般的に使役構文(causative constructions)と再構造化構文('restructuring' constructions)に分類することができる(Burzio(1986:217))。この中で、法(modals)・相(aspectual)・運動(motion)動詞が使用される再構造化構文は、接辞(clitic)の主節移動が可能であるなどの特徴的な統語現象が確認されている(Rizzi(1982))。イタリア語においては、この構造に出現する不定詞形式として、ゼロ不定詞(ϕ -INF)と *di* 付き不定詞(*di*-INF)という代表的な二種類の不定詞補部形式が存在する。 ϕ -INF と *di*-INF という二種類の不定詞形式は、基本的に相補分布するが、両方の不定詞形式が出現可能なものとして(1)のような文がある。

(1) a. *Mi importa riuscirci.* 「私にはそれが成功することが重要である」

b. *Mi importa di riuscirci.*

(1a)は、(1b)における *di* が脱落した文であると解釈することも可能であるが、本稿では、異なる不定詞形式の出現が、再構造化構文が有している統語構造の相違が要因であるという仮説に基づき分析を試みる。このように、 ϕ -INF と *di*-INF という不定詞形式における統語機能を考察するとともに、再構造化構文における統語構造を明らかにすることが本稿の目的となる。

2. *di*-INF の構造

まず、*di*-INF の基本構造を考察するために、*di*-INF が対格として出現する対格構造における不定詞句を分析する。

(2) a. *Gli ho detto di partire.* 「私は彼に出発すると言った」(Kayne(1984:105))

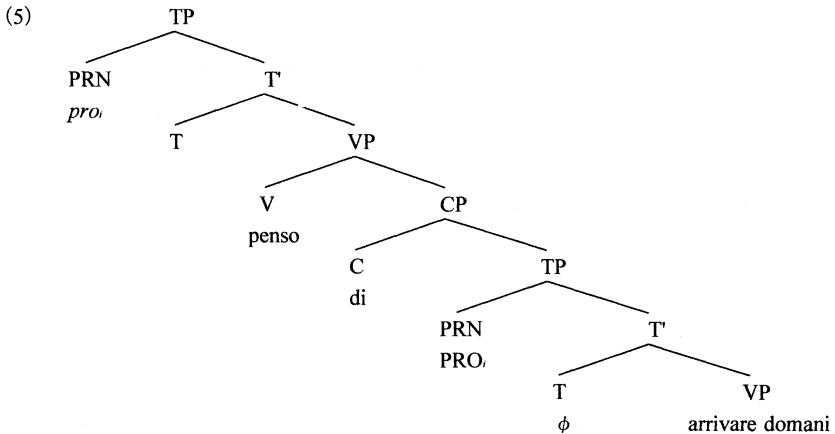
b. *Penso di arrivare domani.* 「私は明日着くと思う」(Dardano & Trifone(1997:400))

(2)では、動詞 *ho detto* の対格として *di*-INF である *di partire* が出現している。このような *di*-INF における *di* に関して、Moro(1997:206)は、Kayne(1984)などの分析に従い、英語の *for*

やフランス語の *de* と同じ補文標識 (C) であることを指摘している。イタリア語 *di* やフランス語 *de* が英語の *for* に相当する補文標識であり、時制標識 (T) である英語の *to* ではないという考え方は、*di* や *de* の前に別の補文標識である WH 要素を置くことができないこと ((3)) や、英語の *to* の前に WH 要素が出現可能であること ((4)) からも説得力のあるものとなる。

- (3) a. *Gli ho detto *dove* di andare.
 b. *Je lui ai dit *où* d'aller. (Kayne(1984:104-105))
- (4) a. I told him *where* to go.
 b. *I told him *where* for her to go. (Kayne(1984:104-105))

この *di* を補文標識とする *di*-INF 補文がイタリア語における不定詞句の対格構造であると仮定すると、(2b)の統語構造は(5)のように示すことができる。



(5)で示したように、不定詞句の対格は、補文標識 *di* による補文標識句 (CP) を形成しており、不定詞 *arrivare* の主語の役割を果たす空範疇 PRO が生起する。この PRO は主節の主語である *pro* がコントローラー (controller) となって、主語コントロール (subject control) される。この不定詞の主語である空範疇 PRO は、(6)のように、目的語コントロール (object control) される場合もある。

- (6) Filù ordina a Nico_i di PRO_j guardare la luna.
 「フィルはニコに月を見るように命じる」(Donati(2008:137))

このように、不定詞句における INF の主語である空範疇 PRO は、義務的コントロール (obligatory control) される。ここで、*di*-INF による対格構造を一般化して(7)のように記述

することにする¹。

(7) 対格構造(*di*-INF) : [_{VP} [_V V] [_{CP} [_C di] [_{TP} [_{PRN} PRO]_φ] [_T φ] [_{VP} INF]]]]]

このような不定詞句の対格構造において、CP における INF の主語は、義務的コントロールを有する空範疇 PRO として出現する。この PRO は、明示的な名詞句などで出現することができないと同時に、補文標識 *di* を超えて移動することもできない。しかしながら、(8) のような文は、(9) で示したような構造から、不定詞句の明示的な主語 *il medico* が補文標識 *di* を超えて移動しているように見える。

(8) *Prego il medico di venire subito.* 「私は医者にすぐ来るよう頼む」

(9) *Prego* [_{DP} *il medico*] [_{CP} [_C di] [_{TP} [_{DP} *t*] [_T *t*] [_{VP} *venire subito*]]]]]

もし(9)の構造が正しければ、(8)の限定詞句(DP) *il medico* が与格となり、*di venire subito* が対格となる必要があるが、(10)に示すように、*il medico* が代名詞化された場合、対格代名詞である *lo* が使用されることから、*il medico* は与格ではなく対格である。

(10) *Lo prego di venire subito.*

このことから、(8)における不定詞句 *di venire subito* は、(11)で示す不定詞句と同様、*di*-INF が接辞 *ne* で代名詞化される斜格を形成する前置詞句(PP)であると考えるのが妥当であると思われる²。

(11) a. *Maria dubita di aver incontrato la persona giusta.*

「マリアは正しい人に会ったのを疑っている」(Graffi(1994:123))

b. [_{TP} [_N Maria] [_T *t*] [_{VP} [_V dubita] [_{PP} [_P di] [_{VP} aver incontrato la persona giusta]]]]]

(12) *Maria ne dubita.*

このことから、(8)の構造は、(13)のように、対格としての *il medico* と、斜格としての前置詞句から構成されていることが指摘できる。

(13) *Prego* [_{DP} *il medico*] [_{PP} [_P di] [_{VP} *venire subito*]]]

*1 不定詞句以外の文法範疇として、対格には DP と定形節が出現する。

対格構造(DP) : [_{VP} [_V V] [_{DP} DP]]

対格構造(定形節) : [_{VP} [_V V] [_{CP} [_C che] [_{TP} [_{DP} DP] [_T *t*] [_{VP} VP]]]]]

定形節の対格を取る動詞の多くは、対応する不定詞句を持つが、通時的には、定形節が発達したものが不定詞句とされる(Skytte(1985))。

*2 *dubitare* は非能格自動詞であり、後続に DP が出現する場合も前置詞 *di* を必要とする。

Nessuno dubitava della sua innocenza. 「誰も彼の無実を疑っていなかった」

そして、この対格を与えられない斜格 *di*-INF の構造は、(14)のように一般化できる¹⁾。

(14) 斜格構造 (*di*-INF) : [_{PP} [_P *di*]] [_{VP} INF]]

本節では、*di*-INF として出現する構造に、対格構造と斜格構造の二種類があることを示した。対格構造における *di*-INF は、CP を形成し、補文標識 *di* と空範疇 PRO を持つ。一方、斜格構造では、前置詞 *di* を主要部とする前置詞句を形成する。

di-INF は、本節で扱ったもの以外に、準連結詞 (quasi-copula) や非対格自動詞の補部にも出現することがある。特に、準連結詞における補部には、*di*-INF と ϕ -INF という二種類の不定詞句が出現する。次節においては、小節構造を形成する準連結詞における補部について考察する。

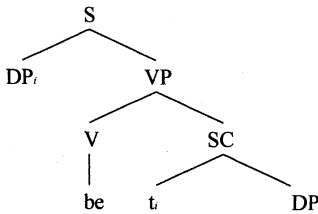
3. 小節構造における不定詞

まず、小節 (SC) に二つの限定詞句が出現する英語の繫辞文 (copular sentence) の構造を (15) のように示すことにする。

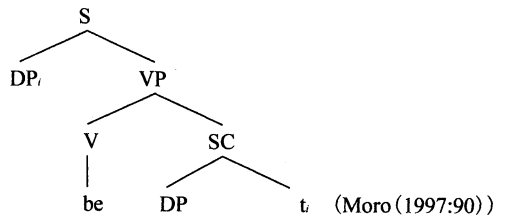
(15) [_{VP} [_V *be*]] [_{SC} [_{DP_{subj}} DP]] [_{DP_{pred}} DP]]]

Moro (1997) では、小節の主語 DP (DP_{subj}) が上昇するものを "canonical copular sentences" (ccs)、そして述部 DP (DP_{pred}) が主語上昇するものを "inverse copular sentences" (ics) と呼んでいる。

(16) a. ccs



b. ics



イタリア語の連結詞 (copula) である *essere* も、ics における連結詞の数の一致などについて英語と異なる点はあるものの、英語の *be* と同じような小節構造を持つ。本稿では、不定詞句について考察を行うものであるが、連結詞 *essere* の小節に不定詞句が出現すること

*1 斜格不定詞句の主要部である前置詞は、動詞によって異なる。例えば *contribuire* 「役立つ」は、*a*-INF を要求する。

がないので¹、埋め込み文の主語を上昇させるなどの点で *essere* と共通する準連結詞² である *sembrare* により考察を進めていく。

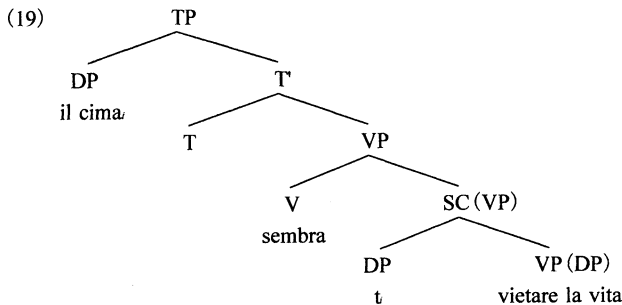
sembrare における文では、小節の主語に虚辞でなく実体を持つ DP が出現する場合、(17) のように、不定詞句は述部に ϕ -INF として出現する³。

(17) *Il clima sembra vietare la vita.* 「その風土が生活を妨げているようだ」

(17)では、主語 *il clima* と述部 *vietare la vita* で小節が形成され、*il clima* が主語上昇して派生している。このような述部に出現する ϕ -INF に関して、Moro(1997:208)は、(18)のような例を挙げて、 ϕ -INF が VP というよりも DP のような働きをしていることを指摘している。

(18) *partire*, è [_{sc} t *morire*]

このような小節に出現する不定詞は、*il morire* のように、定冠詞を付加することが可能であり、DP としての叙的機能を有している。このように、小節内で DP として機能する不定詞句が ϕ -INF として出現すると仮定すると、小節の述部に ϕ -INF が出現している (17) は(19)のような構造として記述できると思われる。



(19)は、小節内の主語である *il clima* が上昇することにより派生し、準連結詞の述部に出

*1 *essere* の小節内の述部には、DP・形容詞句(AP)・PP・過去分詞などが生起可能である。

*2 *sembrare* 以外の準連結詞としては、*parere*/*risultare* などがある。*essere* と同じ文法範疇が出現する構造は、 $[_{TP} [_{DP} DP] [_{VP} [_{V} V] [_{SC} [_{DP} t] [_{DP/AP/PP} DP/AP/PP]]]]$ と記述でき、小節内の主語 DP が上昇することにより派生する。

*3 小節の主語に出現する不定詞句も、 ϕ -INF という形式が出現する (Rizzi(1988:516))。例えば、

Vi sembra giusto lavorare. 「君たちには働くのが正しいと思える」

においては、小節の主語である ϕ -INF の *lavorare* が小節の外に移動している。

Vi sembra [_{sc} [_{DP(VP)} t_i] [_{AP} giusto]] [_{DP(VP)} lavorare.]

現する ϕ -INF である *vieta* は、小節構造において VP ではなく DP として機能していることを示している。このような虚辞ではない主語と叙述的な述部 ϕ -INF で形成される小節は、(20) のように一般化できると思われる。

(20) 小節構造 (ϕ -INF) : [_{TP} [_{DP} DP] [_T _T] [_{VP} [_V V] [_{SC} [_{DP} t] [_{VP} INF]]]]]

次に、準連結詞である *sembrare* において、小節における要素が一つしかないような (21) のような文について考察してみる。

- (21) a. *Sembra che tutto sia già finito.* 「もうすべて終わったようだ」
 b. *Mi sembra di sognare.* 「私は夢を見ているようだ」

Moro (1997) は、(21a) のような定形節が小節の主語、そして (21b) のような不定詞句が小節の「抽象的述部」(abstract predicate) であると述べている。まず、(21a) に関しては、(22) のように、叙述の診断として *come* を挿入した文が非文法的なことから、定形節は小節の述部ではなく主語と位置づけられる。

(22) *mi sembra (*come) che Gianni parti*

「ジャンニは出発したと私には思える」 (Moro (1997:208))

このことから、CP として定形節を持つ (21a) の構造は、(23) のように記述できる。

(23) [_{TP} [_{PRN} *pro*] [_{VP} [_V *sembra*] [_{SC} [_{CP} *che tutto sia già finito*] [_{PRN} t]]]]]

一方、(21b) は、叙述の診断として *come* を挿入した文が (24) のように文法的であることから、*di sognare* は小節の述部である。この述部 *di*-INF は、*di* を補文標識とした補文標識句を形成しており、この構造は (25) のように示すことができる。

(24) *mi sembra come di sognare*

(25) [_{TP} [_{PRN} *pro*] [_T _T] [_{VP} [_{mi} *sembra*] [_{SC} [_{PRN} t] [_{CP} [_C *di*] [_{TP} [_{PRN} PRO] [_T _T ϕ] [_{VP} *sognare*]]]]]]]]]

(25) では、小節の述部として補文標識 *di* による補文標識句が形成されており、INF の主語として PRO を生起させている。この PRO は、与格 *mi* によって与格コントロールされているが、与格補語がない *Sembra di sognare* という文も成立することから、この PRO は選択的にコントロールされている。このように、小節内の主語に音形として表出しない虚辞の *pro* が出現する場合、小節の述部に出現する INF に補文標識 *di* が必要となる。この構造を一般化して記述したものが (26) である。

(26) 小節構造 (*di*-INF) : [_{TP} [_{PRN} *pro*] [_T _T] [_{VP} [_V V] [_{SC} [_{PRN} t] [_{CP} [_C [_C *di*] [_{TP} [_{PRN} PRO] [_T _T] [_{VP} INF]]]]]]]]]

本節では、準連結詞の小節構造に出現する二種類の不定詞句についての考察を行った。小節の述部に出現する ϕ -INF は、虚辞 *pro* 以外の主語の叙述的役割を示し、VP というよ

りも DP として機能する。一方、音形として表出しない虚辞の *pro* が小節の主語となる場合は、*di*-INF の補文標識句を形成する。この *di*-INF による補文標識句は、INF の主語に PRO を生起させるなどの点で対格構造における *di*-INF と同じ構造を持つと考えられる。

4. 法動詞の小節構造分析

前節で考察した虚辞 *pro* 以外の主語と ϕ -INF 述部の小節構造と類似したものとして、(27) のような法動詞 (V_{Modal})¹⁾ における文がある。

(27) a. *Giorgio può aspettare.* 「ジョルジオは待つことができる」

b. *So nuotare.* 「僕は泳げる」

ここでは、(27) のような法動詞の構造が、虚辞以外の主語と述部である ϕ -INF からなる小節を持つ(17)で示した準連結詞 *sembrare* と同じ構造を持つという立場から、これらの法動詞の文を分析していくことにする。Cinque(2004)では、このような再構造化構文を引き起こす動詞を、二元節的(biclausal)構造ではなく単一節的(monoclausal)構造を持つ機能動詞(functional verbs)と位置づけている。この考え方に従って、(27a)の構造を記述すると(28)のようになると思われる。

(28) [_{TP} [_N Giorgio]_i [_T [_T può]_j [_{SC(TP)} [_N t]_i [_T [_T]]_j [_{VP} aspettare]]]]

(28)は、小節内に主語としての *Giorgio* と、述部としての ϕ -INF である *aspettare* があり、小節の主語である *Giorgio* が主語上昇して派生していることを示している。*sembrare* における小節と法動詞の小節が異なる点としては、法動詞は機能動詞として扱うため、小節内の述部の VP が文全体の主動詞となることである。従って、法動詞の ϕ -INF は *sembrare* に見られた小節における叙述的な DP ではなく、主動詞として機能するため、動詞的特性が強く表れることになる。このため、複合時制の助動詞選択は、この主動詞として機能する ϕ -INF が持つ文法特性によって決定されることになる。Burzio(1986:55)では、複合時制の助動詞選択に関して、(29)で示すように、主語と隣接する名詞句との間に束縛関係がある場合に助動詞 *essere* が選択されることを指摘している。

(29) ESSERE ASSIGNMENT: The auxiliary will be realized as *essere* whenever a 'binding relation_i' exists between the subject and a 'nominal contiguous to the verb'.

*1 法動詞(Rizzi(1982:4))は、伝統的には従属動詞と呼ばれるものであり、不定詞を後続させる動詞のことを指す。一般的に、従属動詞は、後続する不定詞を目的語として捉え、他動詞の一種として扱われる。本稿では、同じ統語現象が見られる *potere/ dovere/ volere/ sapere* を法動詞として扱う。

例えば、*sembrare* において小節の述部が ϕ -INF となる構造では、主節の主語と動詞 *sembrare* に隣接する小節の主語に束縛関係があるため、(30)のように助動詞として義務的に *essere* を選択する。

(30) [_{TP} [_{DP} DP_i]_T [_T] [_{VP} [_V V]_{SC} [_{DP} t_i]_{[VP(DP)} INF]]]]

Lui_i è sembrato t_i avere qualche problema 「彼に何らかの問題があるように思えた」

このように準連結詞に出現する ϕ -INF は、助動詞選択を行う要因となることがないが、法動詞における小節の述部である ϕ -INF は、(28)のような構造から派生するため、実質的な動詞の文法素性を備えており、この動詞の素性によって助動詞選択が行われる。

(31) [_{TP} [_N Giorgio]_T [_T ha pututo]_{[SC(TP)} [_N t_i]_T [_T] [_{VP} aspettare]]]]

(28)の近過去形である(31)では、不定詞 *aspettare* に隣接する名詞句が存在しないため助動詞として *avere* を選択している。これとは異なり、小節の述部に助動詞 *essere* を選択する不定詞が出現する場合、(32)のように助動詞として *essere* と *avere* の両方が見られる。

(32) a. Andrea è potuto venire a scuola. 「アンドレアは学校に来ることができた」

b. Andrea ha potuto venire a scuola.

助動詞 *essere* (è) を選択している(32a)は、非対格自動詞 *venire* の非対格名詞句 *Andrea* が主語上昇することにより、束縛関係が存在するため、*essere* の助動詞選択を行っていると考えられる。

(33) Andrea_i è potuto [_{SC(TP)} t_i [_{VP} venire t_i a scuola]]

しかし、(32b)においては、助動詞として *avere* が選択されており、(33)のようには派生していないようである。これは、(32b)では、非対格名詞句の上昇が起きていないということの意味していると思われる。上昇によって助動詞 *essere* が選択されるものとして、接辞の上昇における(34)のようなものがある。

(34) a. Si_i sono voluti riposare t_i. 「彼らは休みたかった」

b. *Si_i hanno voluto riposare t_i.

ϕ -INF にある接辞 *si* が上昇する(34a)では、*essere* の助動詞選択が義務的となり、(34b)のように、*avere* の助動詞選択は不適格となる。一方、接辞の上昇が起こらず、接辞が ϕ -INF に残る場合は、不定詞が非対格自動詞である(32)と同様、*essere* と *avere* の両方の助動詞が選択可能となる。

(35) a. Mario *sarebbe proprio voluto* andarci. 「マリオは本当にそこに行きたかった」

b. Mario *avrebbe proprio voluto* andarci. (Burzio(1986:327))

(35a)の *essere* の助動詞選択の場合は、(33)と同様、非対格名詞句 *Mario* が主語上昇することにより、助動詞 *essere* 選択を行っていると考えられる。

(36) Mario. [_{TP} *sarebbe proprio voluto*] [_{SC(TP)} *t*] [_{VP} *andarci t*]

このように、*avere* から *essere* への助動詞交替 (Auxiliary Change) は、埋め込み文からの接辞上昇では義務的であるが、埋め込み文の非対格自動詞においては選択的となる¹⁾。

本節では、法動詞を小節構造を持つ機能動詞として分析を行った。このような法動詞における文では、法動詞自体が動詞ではなく機能的役割だけを示し、小節内の述部である不定詞が主動詞としての役割を果たす。このため、複合時制における助動詞は、主動詞としてみなされる小節の ϕ -INF によって選択される。このような法動詞における ϕ -INF の構造は、(37)のように一般化される。

(37) 法動詞 (ϕ -INF) : [_{TP} [_{DP} DP]_i] [_T [_T V_{Modai}] [_{SC(TP)} [_N *t*]] [_T [_T] [_{VP} INF]]]]]

5. 非人称動詞における不定詞句

前節までに考察した動詞以外で、補部に不定詞句が出現するものとして、人称屈折として基本的に三人称のみを持つような非人称動詞 (V_{Imp}) がある。このような動詞における不定詞補部としては、i) ϕ -INF だけが生起、ii) *di*-INF だけが生起、iii) ϕ -INF/ *di*-INF の両方が生起、という三種類が見られる。ここでは、このような不定詞補部の生起の相違が非人称動詞の持つ統語構造に関係しているということについて考察する。

まず、基本的に ϕ -INF を出現させる *piacere* を非対格構造として分析してみる。

(38) a. *Mi piace* questo libro. 「私はこの本を気に入っている」

b. *Le piace suonare* il violino. 「彼女はヴァイオリンを弾くのが好きだ」

*1 (32b)や(35b)における *avere* の助動詞選択は、*potere/ volere* の法動詞が機能動詞ではなく、主動詞として処理されている場合に出現するように思われる。この場合は、法動詞は他動詞であり、後続する ϕ -INF は対格を示すと考えられる。このような対格構造の不定詞句は、一般的に *di*-INF という補文標識句で出現するが、このように法動詞が他動詞として使用される時には、 ϕ -INF として出現するようである。

対格構造 (ϕ -INF) : [_{VP} [_V V_{Modai}] [_{CP} [_C ϕ] [_{TP} [_{PRN} PRO] [_T [_T ϕ] [_{VP} INF]]]]]]]

このような構造で出現する動詞は、法動詞以外にも *amare/ desiderare* などがあり、*desiderare* は、 ϕ -INF と *di*-INF の揺れが確認される。*Desidero (di) partire subito*. 「私はすぐに出発したい」

非対格自動詞 *piacere*¹ は、与格を義務項として、(38a)では非対格名詞句 *questo libro*、(38b)では ϕ -INF となる不定詞句 *suonare il violino* を従えている。このような非対格構造を一般化して記述すると(39)のようになる。

(39) 非対格構造 : [_{VP} [_V V] [_{DP(VP)} DP/ INF]]

この非対格項に出現する不定詞句は、小節構造に出現する ϕ -INF と同様、DP として機能する。しかしながら、この *piacere* と同じような非対格構造を持つと思われるいくつかの動詞は、補部に ϕ -INF と同時に *di*-INF を出現させる (Seriani (1989:565))。

(40) a. *Mi importa riuscirci*. 「私にはそれが成功することが重要である」

b. *Mi importa di riuscirci*.

importare の非対格項として *di*-INF が出現する (40b) のような構造に関して、Rizzi (1988:517)では、このような動詞に *di*-INF と対応する(41)のような前置詞 *di* に後続する名詞句からなる前置詞句があり、*di*-INF もこれと同じ *importare* の前置詞補部であると指摘している²。

(41) *Non gli importa di questo*. 「これは彼らに重要ではない」 (Rizzi (1988:517))

このことは、(40b)や(41)の *di*-INF/NP が主語ではなく述部であることを説明するものとなる。そこで、これを本稿での分析方法に適用すると、(40b)の補部は、(26)のような虚辞 *pro* の主語と *di*-INF の述部から構成される小節構造となる。

(42) [_{TP} [_{PRN} *pro*]_T [_T [_{VP} *mi importa*]_{SC} [_{PRN} *t*]_{CP} [_C [_C *di*]_{TP} [_{PRN} *PRO*]_T [_T [_{VP} *riuscirci*]]]]]]]]

(40b)は、虚辞 *pro* と *di*-INF である補文標識句から構成される小節構造を持ち、補文標識句の INF の主語である *PRO* は与格補語 (PP_{DBI}) *mi* に義務的コントロールされる。このように、*importare* が小節構造を持つと仮定すると、 ϕ -INF の補部である(40a)の構造は、*piacere* で示した非対格構造 ((43))ではなく、小節構造 ((44))から派生すると考える方が自然である。

(43) [_{VP} [_{VP} *mi importa*]_{DP(VP)} *riuscirci*]]

(44) [_{VP} [_{VP} *mi importa*]_{SC} [_{DP(VP)} *riuscirci*]_{PRN} *pro*]]

*1 *piacere* と同じような非対格構造を持つ動詞として *interessare* などがある。

*2 さらに、Rizzi (1988:517)は、(40b)や(41)のような前置詞補部が出現する場合、義務的に与格補語が必要であることも指摘している。

a. **Importa di questo*. 「これは重要だ」

b. *Non importa (*di) perdere*. 「失うのは重要ではない」 (Rizzi (1988:517))

(44)における小節構造は、小節の主語 ϕ -INF と、述部の虚辞 *pro* から構成されていることを示している。このような述部の虚辞 *pro* に関して、Moro (1997)は、小節構造を持つ ics において義務的に生起するものとしている^{*1}。このように、小節の述部虚辞 *pro* を設定すると、*importare* が小節構造から派生するという考え方が可能となり、*di*-INF が生起する構造を(45)、 ϕ -INF が生起する構造を(46)として記述することが可能となる。

(45) 小節構造 (*di*-INF) : [_{TP} [_{PRN} *pro*]] [_T [_T] [_{VP} PP_{Dat} V_{Imp}] [_{SC} [_{PRN} *t*] [_{CP} [_C [_C *di*] [_{TP} [_{NP} PRO] [_T [_T] [_{VP} INF]]]]]]]]]]

(46) 小節構造 (ϕ -INF) : [_{TP} [_{PRN} *pro*]] [_T [_T] [_{VP} [_V V_{Imp}] [_{SC} [_{DP(VP)} INF] [_{PRN} *t*]]]]]

ここで、(39)で示した非対格構造と、(46)の小節構造の関係について考えてみたい。 ϕ -INF と *di*-INF の交替は、程度の差はあるが^{*2}、この種の非人称動詞に多く起こる現象である^{*3}。このような交替は、非人称動詞の統語構造が小節構造であると仮定することによって説明が可能となる。つまり、非対格構造は、非対格項を主語、虚辞 *pro* を述部とする小節構造であり、小節内において不定詞句が出現する位置が異なることにより、 ϕ -INF と *di*-INF の交替が起こると考えることができる。そこで、 ϕ -INF が非対格項に出現する(38b)で示した *piacere* の非対格構造も、(47)のように小節構造として考えることにする。

(47) [_{TP} [_{PRN} *pro*]] [_T [_T] [_{VP} *le piace*] [_{SC} [_{DP(VP)} suonare il violino] [_{PRN} *t*]]]]]

このようなことから、小節構造における主語または述部のいずれかが虚辞 *pro* である構造が非人称構文であるという解釈が可能となる。例えば、補文に ϕ -INF だけを生起させる非人称動詞 *bisognare* における(48)を考えてみる。

- (48) a. *Ci bisognano/ bisogna molti quattrini.* 「私たちにはお金がたくさん必要だ」
 b. *Bisogna partire.* 「出発する必要がある」
 c. *Bisogna che tu venga da me.* 「君は私のところへ来なければならない」

*1 Moro (1997)では、"La causa della rivolta sono le foto del muro" 「反乱の原因は壁の写真である」という ics において、動詞 *sono* が "le foto del muro" に一致しているのは、_{[IP} [_{la causa della rivolta}] [_{IP} [_{pro}] [_I sono] [_{VP} [_{le foto del muro}] *t*]]]]] のように、小節の述部の虚辞 *pro* が IP-Spec に上昇しているからであると説明している。

*2 *piacere* などは、現代イタリア語では強く ϕ -INF を選択する。

*3 Serianni (1989:565)では、 ϕ -INF と *di*-INF との交替が起こる動詞として、*bastare/ constare/ dispiacere/ dolere/ fare+O/ giovare/ importare/ interessare/ occorrere/ piacere/ premere/ rincescere/ seccare/ spettare/ stupire/ succedere/ toccare/ valere la pena* を挙げている。

(48a)では、非人称動詞 *bisognare* に *molti quattrini* という三人称複数名詞句が後続しているが、*bisognare* は、後続名詞句に一致する *bisognano* と、三人称単数形態である *bisogna* の両方が可能となる。非対格名詞句と一致しない *bisogna* を非対格構造で考えると説明は困難となるが、*bisognare* を小節構造として分析すると(49)のような解釈が可能となる。

(49) a. [VP [VP ci bisognano] [SC [DP molti quattrini] [PRN pro]]]

b. [VP [VP ci bisogna] [SC [PRN pro] [DP molti quattrini]]]

非対格名詞句 *molti quattrini* を小節における主語と見なす(49a)では、この非対格名詞句に一致して三人称複数形態 *bisognano* となる一方で、非対格名詞句を小節の述部、主語に虚辞 *pro* を置く(49b)では、三人称単数として扱われる主語 *pro* に一致して *bisogna* となる。また、補部に ϕ -INF が出現する(48b)と定形節が出現する(48c)は、それぞれ(50)のように、小節の述部に虚辞 *pro* が生起して派生する。

(50) a. [VP [VP bisogna] [SC [DP(VP) partire] [PRN pro]]]

b. [VP [VP bisogna] [SC [CP che tu venga da me] [PRN pro]]]

このように、*bisognare* は非対格項に虚辞 *pro* が出現する(49b)以外は、すべて述部に虚辞 *pro* が出現する。これは、小節における虚辞述部 *pro* の設定がほぼ不必要であることを意味している。このように、補部に ϕ -INF だけを生起させる非人称動詞は、強い非対格性を示す*1。

次に、補文に *di*-INF のみが生起する *accadere* について分析する。

(51) a. *Mi è accaduta una disgrazia.* 「私に災難が降りかかった」

b. *Mi accade di sbagliare.* 「私は間違えることがある」

c. *Accade che il mio orologio si fermi.* 「私の時計が止まっていることがある」

(51)の構造は、それぞれ(52)のように記述できる。

(52) a. [VP [VP mi è accaduta] [SC [DP una disgrazia] [PRN pro]]]

b. [VP [VP mi_i accade] [SC [PRN pro] SC [CP [C di] [TP [NP PRO] [T [T]] [VP sbagliare]]]]]

c. [VP [V accade] [SC [CP che il mio orologio si fermi] [PRN pro]]]

補部に ϕ -INF が出現しない *accadere* のような非人称動詞は、小節の主語に不定詞句を持つことができない。不定詞句を補部に出現させるためには、(52b)のように、述部に補文標識 *di* を必要とする補文標識句を生じさせる必要がある。これは、補部に *di*-INF だけが

*1 補部に ϕ -INF しか出現しない動詞としては、他に *convenire* がある。

生起する非人称動詞が不定詞句に名詞性を持たせることができないということを示している。このように、非対格項に不定詞を出現させることができないということは、非対格性が *bisognare* などに比べて低いということを示唆していると考えられる^{*}。

本節では、非人称動詞を小節構造における主語または述部のいずれかが虚辞 *pro* である構造であると定め、補部として出現する ϕ -INF と *di*-INF の交替が統語構造と非対格性の相違であるということ考察した。補部に ϕ -INF が出現する構造において、 ϕ -INF は DP として機能する小節の主語（非対格名詞句）となる。そして、小節の述部に虚辞である *pro* を生起させる。一方、補部にある *di*-INF は、小節における述部となる補文標識句であり、この場合の小節の主語は虚辞 *pro* となる。これは、*sembrare* における小節の主語が虚辞 *pro* となる場合に、*di*-INF の補文標識句を持つ場合と同じ現象となる。

非対格性のレベルは、小節構造における主語に生起する ϕ -INF の可否に依存する。 ϕ -INF は DP として機能するため、高い名詞性を示し、小節の主語に置かれる。これは、非対格項に名詞句を置く構造と同じものとなり、強い非対格性を示す。一方、*di*-INF は、高い動詞性を示す補文標識句であり、小節の述部に置かれる。この場合、小節の主語には虚辞 *pro* が生起し、実体を持った文法範疇が非対格項に出現しないことになるため、非対格性は低いものとなる。

6. 結語

本稿では、再構造化構文の法動詞・準連結詞・非人称動詞に出現する ϕ -INF と *di*-INF という二種類の不定詞形式と、その派生する構造の関係について統語的に考察を行った。まず、*di*-INF の不定詞形式が出現する条件としては、(53) のようなものがある。

(53) *di*-INF

- a. 対格構造 : [_{VP} [_V V] [_{CP} [_C di] [_{TP} [_{PRN} PRO]_{ij}] [_T [_T ϕ] [_{VP} INF]]]]]
- b. 小節構造 : [_{TP} [_{PRN} *pro*]_i] [_T [_T] [_{VP} [_{VP} (PP_{Dat}) V] [_{SC} [_{PRN} t] [_{CP} [_C [_C di] [_{TP} [_{PRN} PRO] [_T [_T] [_{VP} INF]]]]]]]]]]]
- c. 斜格構造 : [_{PP} [_P di] [_{VP} INF]]]

di-INF が出現する構造としては、対格構造と小節構造のように *di*-INF が補文標識句となるものと、斜格構造に見られる前置詞句になるものに大別される。対格構造における *di*-INF

*1 補部に *di*-INF だけを出現させる動詞には、*accadere/ andare/ avvenire/ capitare/ riuscire/ venire* などがある。

は、補文標識 *di* と空範疇 PRO からなる補文標識句を形成する。この空範疇 PRO は義務的コントロールされ、*di*-INF 自体は対格を示す。これに対して小節構造における *di*-INF は、小節の主語に虚辞の *pro* が出現する場合に出現し、小節の述部を構成する。

一方、 ϕ -INF の不定詞形式は、(54) のような統語条件で出現する。

(54) ϕ -INF

a. 小節構造①: $[_{TP} [_{DP} DP_i] [_T [_T]] [_{VP} [_V V] [_{SC} [_{DP} t] [_{DP(VP)} INF]]]]]$

b. 小節構造②: $[_{TP} [_{PRN} pro] [_T [_T]] [_{VP} [_V V_{imp}] [_{SC} [_{DP(VP)} INF] [_{PRN} t]]]]]$

(非対格構造: $[_{VP} [_V V] [_{DP(VP)} INF]]]$)

c. 小節構造③: $[_{TP} [_{DP} DP_i] [_T [_T V_{Modal}]] [_{SC(TP)} [_N t] [_T [_T]] [_{VP} INF]]]]]$

小節構造①における ϕ -INF は、小節において虚辞 *pro* 以外の主語に対する述部であり、DP のような叙述的役割を果たす。また、小節構造②における ϕ -INF は、小節における主語であり、述部に虚辞の *pro* が出現する場合に出現する。このように、 ϕ -INF は、小節構造において述部としては、 $[_{SC} [_{DP} DP] [_{VP} INF]]$ 、そして主語としては、 $[_{SC} [_{DP(VP)} INF] [_{PRN} pro]]$ という統語条件で出現し、DP として機能する。これとは異なり、法動詞における ϕ -INF は、小節内の述部に置かれるが、法動詞が動詞でなく機能的役割のみを示すため、文全体の主動詞として機能する。

小節における述部に出現する虚辞 *pro* を設定することにより、本稿で分析した法動詞・準連結詞・非人称動詞は、すべて小節構造として分析可能である。このことから、小節構造におけるこれらの動詞に出現する不定詞の形式について(55)のことが指摘できる。

(55) a. 不定詞句が主語に出現する場合、 ϕ -INF となる。

b. 不定詞句が述部に出現する場合、

i) 虚辞 *pro* 以外の主語であれば ϕ -INF となる。

ii) 虚辞 *pro* が主語であれば *di*-INF となる。

最後に、非対格動詞や非人称動詞に関して、後続に ϕ -INF を従える場合、 ϕ -INF は小節の主語という、非対格構造における非対格項に DP として置かれるため、強い非対格性を示す。一方、*di*-INF だけを後続させる場合、*di*-INF は小節の述部に置かれ、主語には虚辞 *pro* が置かれるため、 ϕ -INF と比較して低い非対格性を示すことになる。従って、 ϕ -INF と *di*-INF の両方を生起させる動詞における交替は、非対格性のレベルの揺れであると結論づけることができる。

参考文献：

- Burzio, Luigi (1986) *Italian Syntax: A Government-Binding Approach*, D. Reidel Publishing Company.
- Cinque, Guglielmo (1990) "Ergative Adjectives and the Lexicalist Hypothesis," *Natural Language and Linguistic Theory* 8, 1-39.
- Cinque, Guglielmo (2004) "Restructuring" and Functional Structure," in Adriana Belletti (ed.) *In Structures and Beyond*, 132-191, Oxford University Press.
- Dardano, Maurizio & Pietro Trifone (1997) *La nuova grammatica della lingua italiana*. Zanichelli.
- Donati, Caterina (2008) *La sintassi: Regole e strutture*. Il Mulino.
- Graffi, Giorgio (1994) *Sintassi*, il Mulino.
- Guasti, Maria Teresa (1991) "La struttura interna del sintagma aggettivale," in Lorenzo Renzi & Giampaolo Salvi (eds.) *Grande grammatica italiana di consultazione, Vol. II: I sintagmi verbale, aggettivale, avverbiale. La subordinazione*, 321-337, Il Mulino.
- Kayne, Richard S. (1984) *Connectedness and Binary Branching*, Foris Publications.
- Mirto, Ignazio Mauro (2008) "Aggettivi e valenza in italiano," *ECHO DES ETUDES ROMANES, Vol. IV (2)*, 5-21.
- Moro, Andrea (1997) *The Raising of Predicates: Predicative Noun Phrases and the Theory of Clause Structure*, Cambridge University Press.
- Radford, Andrew (2004) *English Syntax: An Introduction*, Cambridge University Press.
- Rizzi, Luigi (1982) *Issues in Italian Syntax*, Foris Publications.
- Rizzi, Luigi (1988) "Il sintagma preposizionale" in Lorenzo Renzi (ed.) *Grande grammatica italiana di consultazione, Vol. I: La frase. I sintagmi nominale e preposizionale*, 508-531, Il Mulino.
- Sato, Hiromi (2007) "Infinitival Complements: A Preliminary Study of 'Restructuring' and Causative Constructions in Italian," 『神奈川大学言語研究 第29号』, 1-27.
- Serianni, Luca (1989) *Grammatica italiana: Italiano comune e lingua letteraria*, UTET Libreria.
- Sensini, Marcello (1997) *La grammatica della lingua italiana*, OSCAR MONDADORI.
- Serianni, Luca (1989) *Grammatica Italiana: Italiano comune e lingua letteraria*, UTET Libreria.
- Skytte, Gunver (1985) "L'alternanza 'di + infinito/ che + verbo finito' in italiano, in prospettiva diacronica" in *Società di Linguistica Italiana* 23. 245-250, Bulzoni.
- Ueno, Takafumi (2014) "The Existential Expression of English and Italian: The Derived Sentences from the Small Clause Structure and the Unaccusative Structure," *NIDABA* 43, 89-98.
- 上野貴史 (2010) 「過去分詞の統語機能と派生語」, 『イタリア学会誌 第60号』, 89-110.
- 上野貴史 (2013) 「イタリア語における文法文型と文要素配列：動詞の意味構造と結合価」, 『言語文化学会論集 第41号』, 75-105.